

札幌市における家族視聴とその動因

— 関係メディアとしてのテレビ —

Family Viewing and Its Motive in Sapporo

— Television as a Medium of Relation —

高橋 徹

本稿では札幌市の調査データをもとに、現代家庭におけるテレビ視聴と家族の関係について考察している。先行研究では、家族視聴中心のテレビ視聴のあり方から個別視聴へと家庭におけるテレビ視聴のあり方が変化していることが指摘されている。この指摘をふまえつつ、本稿では札幌の家庭におけるテレビ視聴の現状を視聴行動面、視聴意識面から考察したい。考察にあたって家族関係の形成をなかだちする関係メディアという概念を導入することで、家族関係を準拠点としてテレビの位置価をはかるとともに、テレビを他の関係メディアとの比較の地平におく。結論としては、札幌では個別視聴は行動面、意識面のいずれにおいても優勢な視聴スタイルではないことがわかった。また、個々の視聴スタイルの形成には現在の家族関係と生活史上の経験が要因となっていることが示唆された。

1. はじめに

本稿のテーマはテレビ視聴であるが、焦点がおかれているのは「テレビが何を伝え、視聴者はそれをどう受けとめたか」といったようなテレビのマス・コミュニケーションとしての側面ではない。本稿の視点は、「テレビをみる」ことを介してどのような社会関係が作りだされているのか、あるいは「テレビをみる」ことがどのような社会関係に内包されているのかというものである。より具体的にいえば、家庭という場においてテレビが家族関係のどのような媒体となっているかということである。

この問題について、筆者らが札幌市で行った調査のデータにもとづく考察を行うにあた

り、本稿では1つの概念的な補助線として関係メディアという概念を導入する。関係メディアとは、社会関係形成の媒体となっているものを指す¹⁾。例えば、テレビをなかだちとしてどのような家族関係が形成されているか。こう問うとき、テレビは家族関係において1つの関係メディアと位置づけられている。その際、考察の準拠点は家族(社会関係)の方にある。後で論じるように、家族にとっての関係メディアはテレビだけではない。具体的な役割は様々だが、家族は多様な関係メディアを介してその関係を形成している。この概念的補助線によって、テレビは家族を準拠点として他の様々な関係メディアとの比較の対象となり、いわばメディア研究の地平をこえてその社会的位置価が検討される。

2. 「家族とテレビ」研究

具体的なデータの分析に取りかかる前に、まず先行研究をふまえて家庭におけるテレビ視聴に関する予備的な検討を行っておきたい。家庭におけるテレビ視聴を「家族とテレビ」という視点から検討したものとしては、1960年代に子どもへの影響を主なテーマとした研究が行われるようになってきている⁽²⁾。この「子どもとテレビ」というテーマ領域は、その後も（メディア研究プロパーを除けば）多くのテレビ研究を残している。堀田鶴好は主に1950年代末に九州や四国、大阪で行われた調査にもとづいて、テレビと家族の会話の関係についてラジオ聴取の場合との比較分析を行っている（堀田、1964）。また、大町淑子は、1979年以降の一連の論考で生活における家族の同行動のパターンを分析する試みの一環としてテレビ視聴について言及している（最初のものは、大町（1979））。また、1979年には藤竹暁がテレビ研究の視点からまとまった論考を発表している（藤竹、[1979] 1984）。同年にはテレビ研究の中心的な機関といえるNHK放送文化研究所でも、首都圏で行った「家族とテレビ」に関する調査結果⁽³⁾にもとづいて論文を発表している（本田・牧田、1979a；本田・牧田、1979b）。テレビ放送開始30年にあたる1983年に、小川文弥はこの時点でのいわば総括的論文として「家庭生活とテレビ——『テレビ30年』を考える」を発表している（小川、1983）。その後、NHK放送文化研究所の研究誌『放送研究と調査』では、1985年以降5年おきに行われる「日本人とテレビ調査」の結果が出るたびに、調査項目に含まれる家族とテレビにかかわる分析結果が報告されている。そして2004年には、先の小川による30年総括を引き継ぐかたちで井田美恵子による「テレビと家族の50年——“テレビ的”一家団らんの変遷」が発表された。

海外のメディア研究においてもカルチュラル・スタディーズの流れをくむデヴィッド・

モーレー、ロジャー・シルバーストーン、リン・スピーゲルによる家庭／家族とテレビについての研究など、学ぶべき先行研究に事欠かない。本稿において考察の補助線として導入した関係メディアという概念と関連するものとしては、ジェームズ・ラルの「社会的使用 social use」という概念がある。ラルによれば、テレビは家庭内で家族が様々なニーズを満たすユニークなりソースとなっている。その際、テレビが実際にどのようなかたちで利用されるかは、家族のあり方によって重層的に規定されている（Lull, 1990: 149-150）⁽⁴⁾。

ここでは次項で行う分析の準備として、井田が示した整理に沿って戦後50年間の家族とテレビの関係の変遷を概観しておく（井田、2004: 111）。

- 第1期 1953-1974年：濃密な家族視聴の誕生
- 第2期 1975-1984年：個別視聴のきざしと家族視聴の変質
- 第3期 1985年-現在：個別視聴の拡大とテレビとの団らん

第1期には、とりわけ都市部に出てきて新世帯を形成した人々が、家庭の中心にテレビを求め、この家庭を新たなる「家郷」としたという社会的背景が指摘されている。また、食事行為とテレビ視聴行為の時間帯が重なり合っており、食事をしながらの一家の団らんとテレビ視聴が一体化したのがこの時期であるとされる（井田、2004: 115-122）。

第2期になると、各家庭で所有するテレビの台数も増加し、それによって家庭においても個人視聴に流れる傾向が見られ、一家の団らんとテレビの結びつきが希薄になっている。また、家族と一緒にテレビ視聴においても、家族と視線をあわせるよりは皆テレビに視線を向けながら、家族との団らんの場が取り繕われるようなかたちへの変質してきてい

ることが指摘されている。これらをふまえて井田は、この時期の家庭におけるテレビの力を「家族を分散させる力」、「家族の空白をうめる力」の2点に集約している(井田, 2004: 122-130)。

第3期には、テレビ番組の内容自体も特定の層をターゲットにするようになり、個別視聴を促進する要因ともなっている。この時期にはテレビの家族視聴をめぐる調査データにも個別視聴が取りあげられるようになっており、【図1】⁽⁵⁾と【図2】に示した調査結果を引き合いに出しながら、個別視聴化の傾向を指摘している。

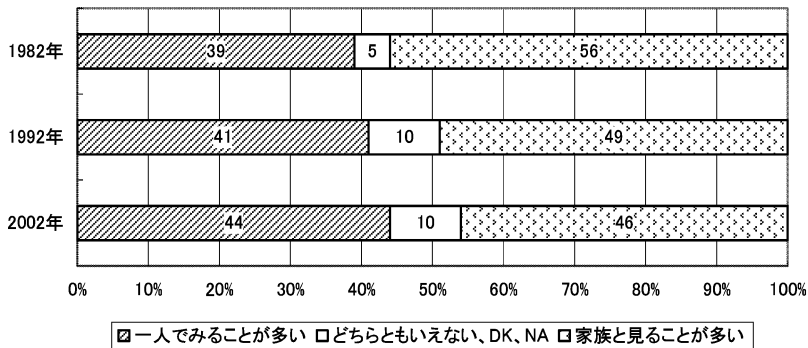
このように視聴の個別化が進展すると、家族との団らんに代わる新たな「団らん」のかたちとして「テレビとの団らん」というスタイルが現れてくる。「実は、一家団らんはテレビの中に吸収されたのである。テレビを囲んで人々が集まって楽しむという形は、今やバ

ラエティ番組やバラエティ化した各種の番組の中に取り込まれている」(井田, 2004: 135)⁽⁶⁾。井田は最後に、こうした推移を「皮肉にも、“テレビ的”一家団らんを作ったテレビ自身が、1人で見るという視聴スタイルによって家族の分散を促してしまった」とまとめている(井田, 2004: 139)。つまり、関係メディアという視点からいえば、テレビは家族の統合メディアから分散メディアへと変貌したということになる。

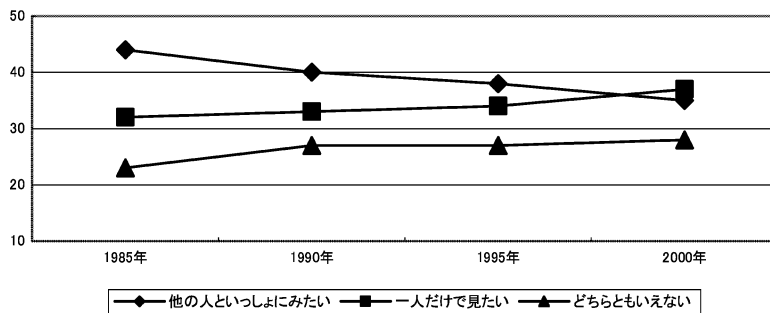
3. 家庭におけるテレビの家族視聴と個別視聴——札幌調査のデータ分析から

3.1 検討課題と調査概要

ここで使用するデータは、2004年度から2006年度の3カ年度にわたって、札幌学院大学と北海道文化放送で共同企画・実施を行ったテレビ視聴および各種メディア利用につい



【図1】



【図2】

ての実態調査でえられたものである。調査は、3回とも集票調査(郵送法, 時期は11月から12月)と聞き取り調査(時期は3月)をセットで行った。集票調査では、札幌市内各区(全10区)の有権者名簿を台帳とし、等間隔抽出を行った。各区での抽出サンプル数は札幌市総人口に占める各区の人口比に対応させた。抽出サンプル数は、2004年度が1000人、2005年度が1050人、2006年度が1400人であった。ここから80歳以上の高齢者、および高齢者介護施設等に居住しており、健康上等の理由から回答が困難と思われるサンプルを除去し、対象サンプルを確定した(2004年度:962人、2005年度:987人、2006年度:1299人)。有効回収率(N=有効回収数)はそれぞれ、2004年度が44.7%(N=430)、2005年度が44.5%(N=439)、2006年度が22.2%(N=289)である。以上の集票調査は大学側スタッフが担当し、実施した。聞き取り調査は、各年度の集票調査の際に対象者に聞き取り調査への協力意向伺いを行い、協力の意思が確認できた対象者から年齢、性別のバランスを考慮して対象者を選出した。各年度それぞれ15名(2004年度)、7名(2005年度)、12名(2006年度)に対して、大学側スタッフと放送局のスタッフが共同で行った。

本稿の主題は家庭におけるテレビ視聴と家族の関係にあるので、以下の検討ではこの主題に関連する項目を取りあげて分析を行いたい。分析においては、家族視聴について詳しく調査した2006年のデータを使用する⁽⁷⁾。また独居世帯については家族視聴の選択/非選択の識別が意味をなさないため、原則として分析から除外する。

3.2 家族と視聴行動

【表1】に示したのは、普段テレビを視聴する際にどのように番組を選択しているのかについて単数回答で聞いたものである。個別視聴とは、「ひとりでテレビをみることが多いの

【表1】

	N	%
単独視聴	87	33.0
巻込視聴	98	37.1
同調視聴	78	29.5
合計	263	99.6

で、自分が見たい番組を見ていることが多い」回答者で、同居家族がいながら実質的には個別視聴が中心であることを意味している。

巻込視聴はテレビ視聴の際に「家族も一緒にいるが、自分がみたい番組をみることが多い」回答者で、同調視聴は逆に「家族が選んだ番組と一緒にみるが多い」という回答者である。巻込視聴と同調視聴をしている回答者を家族視聴者とみなし、これと個別視聴者を対比すると、回答者の3分の2が家族視聴者、3分の1が個別視聴者であることになる。この点については、2005年の調査データでもほぼ同様の結果が出ている⁽⁸⁾。札幌市では、家族視聴を中心とする家庭が多いことがわかる。

3.3 家族と視聴意識

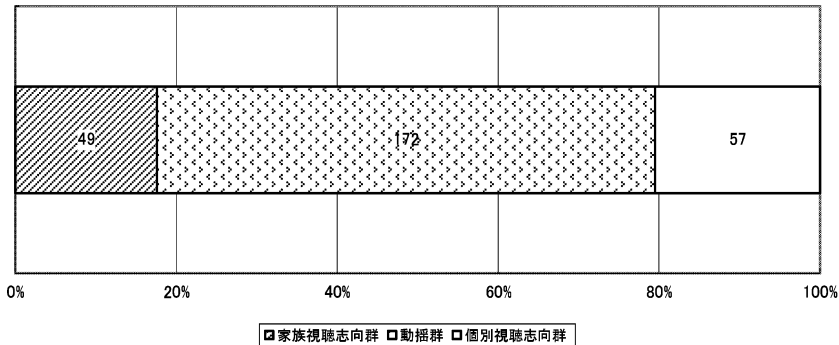
次にテレビ視聴に関する意識の面から、家庭におけるテレビの位置を考えてみたい。【表2】に示したのは、視聴意識についてたずねた質問の集計結果である。

まず、家族の団らんにテレビは欠かせないかをたずねた質問では、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」という回答が6割をこえ、肯定的な回答が多かった。テレビ視聴の個別化がすすみ、家族視聴がすたれたのであれば、このような意識は少数派であってもおかしくはないが、実際にはまだ家族の団らんとテレビを結びつける回答が多いことがわかる。

これに対して、テレビは家族がそれぞれみようとみればよいという考えに肯定的な回答も約6割を占めた。さらに、テレビは家族がそろってみるのがよいという考えに対し

【表2】

	そう 思う	どちらかとい えばそう思う	どちらかとい えばそう 思わない	そう 思わない	N
家族の団らんにテレビは欠かせない	24.8	36.2	25.9	13.1	282
テレビは家族がそれぞれ見たいように見ればよい	23.0	36.5	26.6	13.8	282
テレビはできるだけ家族そろって見るのがよい	11.2	30.9	34.5	23.4	278



【図3】

でも、否定的な回答が多かった。

このように全体としてみると、テレビが家族の団らんに欠かせないとする意見が多い一方で、個別視聴を是とする意見が多く、互いに矛盾しているようにも思われる。

それでは、この3つの質問に対する各回答者の回答の組み合わせはどのようになっていだろうか。回答者個人のなかでは、なんらかの整合性がみられるのだろうか。この点をまとめたのが【図3】である。「家族視聴志向群」とは、「テレビが家族の団らんに欠かせない」「家族そろってテレビを見るのがよい」という考えのいずれにも肯定的に回答し、「テレビは家族それぞれが見たいように見ればよい」という考えには否定的に答えた回答者群である。これとまったく逆に家族視聴には否定的、個別視聴には肯定的な回答をした群を「個別視聴志向群」とした。また、回答に一貫性がなく、家族視聴と個別視聴の双方に肯定的な回答をするなど、回答が揺れている群を仮に「動揺群」とする。

この結果を見ると、家族視聴志向群、個別

視聴志向群のいずれも2割程度にとどまっており、この2つの視聴志向は少数派である。逆に動揺群の占める割合が高いことから、回答者個人の内部にも相反する志向が混在している例が多いことがわかる。しかし動揺群は、本当に相矛盾する志向が多数の回答者の中にあることを示しているのだろうか。

3.4 視聴意識の背景 — 聞き取り調査から

前項までの検討から、視聴行動のレベルでは家族視聴の割合が多いことがわかったが、視聴意識のレベルでは家族視聴を重視するグループと個別視聴を重視するグループという2極の間に大きな動揺群があることがわかった。本項では、集票調査の対象者に直接話を聞いた聞き取り調査の結果から、この動揺群の背景を考察する手がかりを探ってみたい。まずは各群に対応する回答者の回答記録を順次参照する。

① 家族視聴志向群

この群に属する回答者で聞き取り調査に

じてくれたAさん（40代女性，パート・アルバイト）は，4人家族で主に同調視聴をしており，1日の平均視聴時間は4時間30分である．Aさんに自身が記入した調査票を示し，一貫して家族視聴を志向する回答をしている点を指摘して，その理由をたずねたところ次のような回答があった．

「そうですね，私が小さい時は逆にご飯の時はテレビを見せてもらえなかったので，逆に話題を提供して笑っても，食事中に笑うんじゃないっていう父だったので，それは絶対やだなと思ってましたので．」

Aさんの家族視聴志向には，その生活史上の背景があることがわかる．食事なら食事，会話なら会話と厳格に区別した父に対する反発から，Aさんの家族視聴志向的な態度が来っていた．

② 個別視聴志向

個別視聴志向群に属する回答者Bさん（40代男性，パート・アルバイト）は，3人家族で巻込視聴を主とし，平均視聴時間は3時間30分である．BさんはAさんとまったく対照的な生活史上の背景から，食事中にテレビをみるのはよくないという考えをもつにいたっている．

「反面教師です．父親が，テレビを見ながら食べるんですよ．ボロボロボロボロこぼすんです．それ見てて子供ながらに，なんかだらしなくなっていくか，で，祖父がまったくその逆なんですよ．母方のね．父と血縁ないですけど，食べるなら食べる，見るなら見るっははっきりしなさい．」

Bさんの父は食事中にテレビに気を取られることが多かったようで，それによって食事をこぼしたりする父の姿がBさんの目にはだ

らしなくみえたという．同じ年代でもAさんの家庭とは対照的で，BさんはむしろAさんの父のように食事とテレビを切り離す祖父に共感したようである．

さらにBさんは，こうした背景もあってかテレビとの関係について次のような考えを示している（〔 〕内は引用者補足）．

「そうですね，〔テレビがついていると注意が〕テレビのほうにいっちゃうんで，こう1対1，1対1になっちゃうんで，テレビついてないほうが困らんにはなるのではないか，テレビとの関わり方っていうのはやっぱり個別だだと思うんですよ．」

井田が描いた第2期のテレビと家族の関係では，関係の希薄化した家族の間の隙間をテレビが埋めていたが，Bさんの指摘が示唆するのはむしろこの関係の希薄化を，関心の個別化という点においてはテレビ自体が作り出しているということである．ちょうどBさんの幼少時代に近い1964年の論文で堀田は，ラジオとテレビを比較分析して，ラジオは放送内容と関係のない会話も触発するが，テレビはより放送内容に即した会話を引き出すのであり，テレビによって会話は増したもののその会話はテレビに引き込まれたものであることを指摘している．そして結論として，「テレビはスクリーンの前へ惹きつけることによって家族を家に引きとどめる．だが，それはスクリーンと個人を結合するのであって，家族相互やスクリーンと社会とを結合するものではない」と述べている（堀田，1964：7）．それゆえ，家族の会話を重視するなら，むしろテレビがついていないほうがよいという考え方もありうるわけである．したがってBさんのようにテレビは個別視聴がよいと考えているからといって，脱家族志向だとはいえないといえる．

家族視聴志向のAさんと個別視聴志向のB

さんとは、テレビに対する態度は異なっているが、テレビに対する明確な「主張」をもっている点で共通している。その背景には、それぞれの生活史があった。しかし、個別視聴志向の回答をした対象者の話からは、それとは別に家族の生活実態そのものからくる個別視聴志向も浮かび上がってくる。

Cさん(60代男性、無職)は、ご自身夫婦に娘夫婦とその子供である幼稚園児、小中学生の孫を含む8人家族で巻込視聴を主とし、平均視聴時間は4時間である。Cさん宅には4台のテレビがある。2階のリビングにメインテレビ(テレビ①)とテレビゲーム用のテレビ②、3階にはデジタル録画機器がついた娘夫婦用のテレビ③と中学生の孫用のテレビ④となっている。メインテレビを家族みんなでみるのは食事時だけで、あとはそれぞれのテレビをみている。次のようなCさんの話から、テレビをめぐるかなりダイナミックな動きが家庭内でおこっていることがわかる。

「ええ、もう学校や幼稚園行ってますんで、当然2時から3時頃まで帰って来ないから見ないし、[孫たちがみるのは]帰ってからね。[ただテレビではなく]ほとんどゲームやったりして。[孫たちがみるのは]まあポケモンとか、ドラえもんとかかって[放送するのが]夜ですから、その時間なると上〔3階〕でおばあさんDV〔デジタル・ビデオ・レコーダー(DVR)で番組を〕録ってるから下〔2階のテレビ①〕でみせて。下、なんも予定ないから見なさいって。それで何時になったら切り替えるよって言うておかないと。そしてみせてます。で、あとそれ済んでダメになったら今度あのテレビ〔テレビ②〕のほうに行っって、ビデオ見たりしてるんですね。

……略……

ええ、もう、孫達も何時になったら何入ってほしい知ってますので。だから、[テレビ①でみてよいか]聞いてくるから、何時から

何時まではダメだよと。何時からならいいよと。あともう10時以降になったらもう寝てるんですから、そういうやり方ですね。」

Cさんの奥さんはお気に入りの番組などをよくDVRで録画するため、録画時には孫たちが3階(テレビ③)を追われて2階においてくる。そこで、メインテレビ(テレビ①)があいている場合は、そこで視聴させるものの、Cさんのみたい番組がはじまると、孫たちはさらにテレビ②に移動してビデオなどをみているということである。このように家庭内でテレビ間の移動を行いながら、家族がテレビの前に集まる食事中を除いてそれぞれがみたいものをみるという視聴行為が行われている。これは藤田真文の言葉を借りれば、「離合集散する家族視聴」である(藤田、2006:35)。

家庭におけるこうした視聴スタイルについて、Cさんは次のように述べている。

質問者:「みたいものはそれぞれでみるほうが良いという考え方ですか?」

Cさん:「そうですね。どうしても家の場合は、そういう風になってしまいますから、まあだいたい年齢の関係もあるし。

中学生は中学生で『学校へ行こう!』だとか、ああいった物が好きだろうし、我々はそんなの関心ないからこういうの〔ニュースなどを〕みると。じゃあテレビ、もう1台つけてやろうというふうになって各部屋でもってみえますんでね。だからそれぞれ、違った形で、自分の好きな分野でみるようになってます。」

Cさん宅のテレビ台数が増えた契機も、ここで示唆されているように家庭内での関心の多様化に対応したものであることがわかる。Cさん一家は大家族で家族間での年齢差も大きいいため、おのずとテレビ番組への関心も異

なり、好むと好まざるとにかかわらず、個別視聴のかたちを取らざるをえない。この例の場合、AさんやBさんのように何か生活史上の体験から家族視聴なり、個別視聴を志向しているわけではなく、まさに生活実態そのものからいやおうなく個別視聴のかたちをとっており、テレビ台数の増加もそれをあとづけるかたちでおこっている。藤田は、「携帯電話の普及が電話コミュニケーションの個人化をもたらしたのではなく、電話コミュニケーションの個人化が携帯電話の普及に先行していた」ことに着目して、テレビ視聴の分散化・個人化においても同様の見方ができると述べているが、Cさん一家におけるテレビ台数の増え方はそれを裏づけている（藤田、2006：35）。

Dさん（60代女性、主婦）は、夫・息子・娘との4人暮らし。個別視聴を主とし、平均視聴時間は2時間である。Dさんは主婦で昼間も在宅しているが、朝昼ともテレビはつけない習慣のため視聴時間は短い方である。テレビを視聴するのは主に夜であり、その時間帯は家族も在宅しているが、個別視聴のかたちをとっている。Dさん自身が個別視聴を志向しているわけではなく、夕食後に家族がそれぞれ個別行動をとることから、おのずとDさんがリビングに残り、リビングのテレビで個別視聴になるためである。

Dさん：「そうですね、あの、みんなみたい物が違うっていうのもあるんですけど、いわゆるチャンネル争いみたいのとか、そういうのはなくて、結構テレビがあいてるんですね。ええ。娘は食事済めば自分の部屋上がりちゃいますし、主人も結構自分の部屋にこもっちゃうんで。ええ。だから結構9時くらいからテレビみてるのは私だけですわね。」

このように、Dさんの場合も自身の「主張」として個別視聴を志向しているわけではな

く、Dさんの生活実態そのものを反映するかたちで、個別視聴を志向する考え方に共鳴しているのだと考えられる。

③ 動揺群

Eさん（40代女性、正社員・正職員）は、夫婦2人暮らしで個別／巻込／同調の各視聴スタイルについての問いには無回答で、平均視聴時間は3時間である。「テレビは家族の団らん不可欠か」という問いには「そう思わない」とテレビと家族団らんの結びつきには否定的だが、かといってテレビは個別視聴でよいとも考えていない（「テレビは家族それぞれみたいものをみればよいか」という問いには「どちらかといえばそう思わない」、「テレビは家族そろって見たほうがよいか」という問いには「どちらかといえばそう思う」と回答）。ではそのような回答は、どのような認識の表れなのであろうか。Eさんへのインタビュー当日は夫も一緒に訪れ、2人で話を聞かせてくれた。その一部でEさん夫妻は、テレビと家族団らんの関係についてたずねた質問に、次のように答えている。

Eさん：「やはり使い方とか見方とか1つだと思っんですよね。だから必ずしもなんか、テレビに限らずね、それがなければいけないっていう風には、あんまり考えたことはないです。」

質問者：「そうですね。ご主人はいかがですか。」

夫：「まあそう、そうですね。まあ1つの手段ではあるとは思いますが。あとは、うちで言えばね、お酒であったり。」

Eさん：（笑）。

夫：「ビリヤードやってみたりとか。」

質問者：「話の種は色々？」

夫：「まあ、ありますんで。まあ、テレビもその1つなんですけどね。テレビがなきゃダメっていう風ではないと思いますね。はい。」

テレビは話の種の1つではあるが、それが無いと会話ができないというわけでもないという認識を夫婦で共有しているようである。テレビは家族の団らんに「不可欠」ではないが、テレビが会話の種になっていることも次の話からわかる。

質問者：「普段、例えばお食事の際とかりビングのほうにいらっしゃる時によく雑談するのは、どのようなことが多いんでしょうね。」

Eさん：「仕事のこととか多いかなあ。あとテレビついてたら、それだよな。だよな。〔夫の方を向いて確認〕」

夫：「テレビの話ですね。そのやってる(笑).」

Eさん：「あれ変だよなとか、これ変だよなとか。」

またEさん夫婦は共働きで、休日もなかなか会わないという。そのため一緒に過ごす時間については、ある程度考えた過ごし方をしていることもうかがえた。いま引いた話の中で興味深いのは、テレビ以外にもお酒であるとか、ビリヤードといった話の種があるという点である。Eさん夫妻のリビングには、ビリヤード台があり、その前にメインテレビとして大型の液晶プロジェクターが設置されている。このビリヤード台を使って夫婦でビリヤードをすることがあるようである。こうしたテレビ以外の関係メディアが、テレビの位置を相対化しているのではなかろうか。それゆえEさん夫婦においては、テレビが家族の関係を形成するというよりも、テレビを使って家族の関係を形成しているのだといえる。

他の動揺群の回答者からも、テレビは家族の話の種になるが不可欠だというわけではないという距離感からテレビと家族の関係を部分的には肯定し、かつ部分的には否定する回答が出ている。主に同調視聴をし、平均視聴時間が3時間のFさん(20代男性、正社員・正職員)は、「テレビは家族の団らんに不可欠

か」という問いに「どちらかといえばそう思う」と回答した理由について次のように答えている。

Fさん：「そうですね。消えてても別に問題はないんですけど、あったらあったで例えばみんな共通の話題になったりとかっていうこともあるんで。欠かせない程ではないと思いますけど、あってもいいかなっていう感じですよな。」

さらにFさんは、「テレビは家族それぞれみたいものをみればよいか」、「テレビは家族そろってみたいほうがよいか」のいずれの問いにも「どちらかといえばそう思う」と答えており、個別視聴を是認する一方で、家族視聴を求めてもいる。しかしこれも、テレビは一緒にみれば話の種にはなるが、それぞれがみたいものがあればそれぞれでみるのもよいという距離感の反映だと考えられる。

テレビ視聴がもつ注意の分散化に批判的で、家族の団らんにプラスにならないという否定的な考えを示す回答者は動揺群にもみられた。主に個別視聴をし、平均視聴時間が2時間のGさん(40代女性、主婦、3人家族)は、次のように語っている。

Gさん：「はい。やはり食事の時間が一番の団らんだと思うので。テレビがついてるとまったく話さないし、手の動きも止まるので、一向に食べ終わらないんですよな。」

質問者：「なるほど。そうすると、テレビは必ずしも団らんににとってプラスにならないと。」

Gさん：「ええ、やはり、テレビのほうに集中しちゃいますので。はい。」

Gさんは、「テレビは家族の団らんに不可欠か」という問いには「どちらかといえばそう思わない」として家族の団らんとテレビの結びつきに否定的に回答している。ところが、

「テレビは家族それぞれみたいものをみればよいか」という問いには「どちらかといえばそう思わない」とし、「テレビは家族そろってみたほうがよいか」という問いには「どちらかといえばそう思う」と答えている。Gさんの語りをふまえて考えると、Gさんは食事時の団らんとテレビの結びつきについては否定的だが、おそらくそれとは別に家族と一緒にテレビをみることは肯定的に捉えていて、視聴が個別化することには否定的なのだと思う。つまり、Gさん宅では食事時にテレビがついていると食事も団らんも阻害してしまうが、それ以外の場面については、Gさんはテレビと一緒にみるという行為には価値をみだしているのだといえる。

4. 関係メディアとしてのテレビ

前項での検討から、札幌市のデータにみられた多数の動揺群は、かならずしも多数の回答者がテレビと家族の関係について相矛盾する志向を抱えていることを示すわけではないことがわかった。例えば、Eさん宅ではテレビは夫婦一緒に時間をすごすための関係メディアの1つであり、それ以上でもなければそれ以下でもない。Fさん宅では、テレビは基本的についていても消えていてもかまわず、ついていたら話の種にするという距離感のある接し方をしている。Gさんとしては、食事中は食事に集中してほしいが、それが終われば家族でテレビをみるのもよいと考えており、関係メディアとしてのテレビの価値は生活の場面に応じて変化することを示している。いずれにも共通するのは、家族を準拠点としてテレビの価値をそのつど判断している点である。

他方で、個別視聴志向群と家族視聴志向群の中には、現在の家族関係のあり方ではなく家庭生活における過去の経験を背景として現在のテレビ視聴志向を形成している回答者がいることがわかった。現在の家族関係のダイ

ナミズムだけではなく、個々の成員がもつ生活上の背景もまた家庭におけるテレビ視聴のあり方に関与している。以上の聞き取り調査のデータはあくまで一部のサンプルについての知見を提供するにすぎないが、各群の回答パターンが生まれてくる背景について考察するうえで、1つの示唆を与えるものである⁽⁹⁾。

我々が仮に動揺群と名づけた一群の回答者は、かならずしも相矛盾する志向をもちあわせているわけではなかった。むしろ動揺群は、家庭生活のダイナミズムの中でテレビとの距離を測りながら柔軟にその位置価値を評価している回答者を含むものであった。この動揺群がテレビ視聴志向において多数を占めたことは、「個別視聴か／家族視聴か」という図式にこだわらず個々のテレビ視聴のあり方に学ぶことで、家庭におけるテレビと家族の関係について様々な示唆が得られることを示している。そこから浮かび上がってくるテレビと家族の関係は、(ラルが「入り組んだ intricate」)⁽¹⁰⁾と述べたような複雑な様相を呈するかもしれないが、むしろそこがこの研究の出発点だといえるだろう。

注

- (1) この概念は、ニクラス・ルーマンのメディア論に示唆をえたものである (Luhmann, 1997: 195ff.). 本稿ではこの概念を、伝達論的メディア観から離脱するとともに、家庭におけるテレビの位置価値を家庭内にある他のアイテムとの比較の地平において検討するための補助線として導入した。
- (2) 例えば、社会学者のものでは北村(1966)、また教育(心理)学でも依田新らによる依田編(1964)がみられる。
- (3) NHKが行った「家族とテレビ」に関する調査としては、他に1980年の「家族とテレビII調査」(対象地:群馬県)、2002年の「家族の中のテレビ調査」(対象地:東京30キロ圏)があ

る。1979年と1980年の2回にわたって行われた「家族とテレビ調査」の結果は、NHK放送世論研究所編（1981）にまとめられている。

- (4) ラルのこの視点は、テレビと家族の関係を文化、社会的コンテクスト、家族成員のパーソナリティ、家庭という場そのものの特質やテクノロジーとしてのテレビの特質をも視野に入れて研究しようとするもので、深みのある理論的課題を示している。テレビを「リソース」として捉える視点は、テレビを「関係メディア」として捉える視点とも重なりあっている。この点については本稿を予備的考察として、別途検討を行いたい。なお、ラルの「社会的使用」概念についてはLull（1980）、祐成（2006）もあわせて参照。
- (5) 井田（2004）では1992年と2002年の比較だけを示しているが、ここではより長期にわたる変化を見るために1982年のデータを付加した。
- (6) 同様にテレビ50年を受けて編まれた田中・小川編（2005：267-269）では、テレビ視聴と家族についてそれまでの研究で得られた知見をまとめており、現時点での最終的な知見としてここに引いた井田の文献を引きながら一家団らんのテレビへの吸収を挙げている。
- (7) この調査の詳細、および全設問の単純集計については、札幌学院大学社会情報学部・北海道文化放送（2007）参照。集票調査部分の主だった集計結果は、高橋・高田・祐成（2008）にまとめた。
- (8) 個別視聴30.6%、巻込視聴29.0%、同調視聴34.4%、子どもにみせたい番組を視聴4.8%、その他1.1%（同様に独居者は集計から除外した、N=372）。
- (9) 回答者が生活の場面ごとにテレビの価値を評価していることから、今後の調査における質問項目の改善にも示唆を与えるものである。
- (10) ラルは次のように述べている。「テレビ番組を選んだり、視聴したりすることは……入り組んだ家族の日常活動である。それは、コミュニ

ケーション研究者によっていまだ深く研究されていないものである」（Lull, 1990: 94）。

参考文献

- 藤田真文（2006）「テレビと『家庭—家族視聴』パラダイム」『情報通信学会誌』24(1)、情報通信学会：31-37。
- 藤竹暁[1979]（1984）「テレビと家庭生活」『現代のエスプリ 放送文化』、No.208、至文堂：69-83。
- 本田妙子・牧田徹雄（1979a）「家族とテレビⅠ」『文研月報』昭和54年7月号、NHK放送文化研究所：1-10。
- 本田妙子・牧田徹雄（1979b）「家族とテレビⅡ」『文研月報』昭和54年8月号、NHK放送文化研究所：1-9。
- 堀田鶴好（1964）「テレビと家族の話合いについて」『愛媛大学紀要 第5部 教育科学』Vol. 11, No.1、愛媛大学：1-8。
- 井田美恵子（2004）「テレビと家族の50年」『文研年報』2004、NHK放送文化研究所：111-144。
- 北村日出夫（1966）「テレビ視聴行動認識の一視角—家族集団のテレビ視聴をめぐる—」『人文学』87、同志社大学人文学会：38-57。
- Luhmann, Niklas（1997）*Die Gesellschaft der Gesellschaft*, Suhrkamp.
- Lull, James（1980）The social uses of television, *Human Communications Research*, vol.6, No. 3: 197-209.
- Lull, James（1990）*Inside Family Viewing—Ethnographic Research on Television's Audience*, Routledge.
- NHK放送世論研究所編（1981）『家族とテレビ—茶の間のチャンネル権』日本放送出版協会。
- 小川文弥（1983）「家庭生活とテレビ—『テレビ30年』を考える」『国民生活研究』第23巻第1号、国民生活センター：10-27。
- 大町淑子（1979）「家庭内の団らんを中心とした家族の同一生活行動の考察（第1報）：小・中学生

をもつモデル家族の共通起床在宅時間とその生活行動』『千葉大学教育学部研究紀要 第2部』Vol.28, 千葉大学: 241-267.

札幌学院大学社会情報学部・北海道文化放送(2007)『札幌市民のくらしとテレビ2006 報告書』.

祐成保志(2006)「テレビ研究における民族誌的アプローチの再検討」『社会情報』Vol.15, No.2., 札幌学院大学社会情報学部: 133-158.

高橋徹, 高田洋, 祐成保志(2008)「札幌市民のメ

ディア利用とテレビ視聴態度——札幌市民のくらしとテレビ調査2006」『情報科学』札幌学院大学情報科学研究所・札幌学院大学電子計算機センター, 第28号: 21-36.

依田新編(1964)『テレビの児童に及ぼす影響』東京大学出版会.

謝辞 本稿は, 札幌学院大学研究促進奨励金(共同研究)を受けて行われた研究の成果である. 記して感謝したい.